

かたる

談

人生 仕事

歴史作家

星 亮一さん(80)

▶▶▶ 4

△郡山市に本社を置く福島中央テレビが1970年開局、星さんは福島民報から移った▽

テレビ記者に転身

「来ないか」と誘いがあった。民報時代に映画を作った経験があり、映像の世界に抵抗はない。当時35歳新しい仕事に挑戦したいと思いました。

作家の早乙女貢さんを

斗南の会津人取材 薩長批判過激さ増す

ポーターにして作った番組が「風雪斗南藩」です。早乙女さんは会津藩士の末裔(まつえい)で、雑誌に「会津士魂」を連載していました。会津の集まりで知り合い、私は弟分になった。臨場感が出るように雪の季節を選び、早乙女さんと青森県下北半島を取材して回りました。戊辰戦争に敗れた会津藩士1万7000

三沢市で会津の集まりを取材していた時です。40歳ぐらいの女性が来て「私は母から『会津人と名乗ってはいけない』と言われ、今まで育ってきました。会津人と人前で名乗ったのは、今日が初めてです」と言います。続けて「会津人の住む町にいるとほかの人に分かってしまうので、バスに乗るときは隣の町まで歩

へ。戦争をしたのだから、勝ち負けはある。それにしても薩長政権にはヒューマニズムが欠落している。会津の「戦後処理」に当たったのが長州藩で、「会津人をこの地球上から消滅させる」戦略だった。それが後の朝鮮半島、中国大陸への侵略、太平洋戦争につながった。外地で、戊辰戦争における会津藩への仕打ちと

を行い、戊辰戦争の戦死者3000人の名簿を作っていた。頭の回転良く、温厚で人望のある人でした。北村さんの取材では青森市内の自宅を訪ねた。表情は厳しく、また真面目な人だと思いました。いつも青森県の発展を考えていた。東京出張の帰りに、よく会津に立ち寄ったようです。会津の運命を呪うのではな

く、プライドを持って生きました。会津の精神のいいところを受け継いだ人と言われました。斗南の会津人が、長州と和解することはあり得ない。そして私の薩長批判も、下北取材を機に過激さを増していきました。(聞き手は生活文化部・佐藤昌明)

▶ 次回は16日掲載

人が移封された所。コメは取れない。食べる物もなく、掘って立て小屋のような家で、わらの中で寝た。扉はなく風雪は防ぎようもない。過酷な生活環境でした。会津藩士の子で後に陸軍大将になる柴五郎の幼いころの体験が「ある明治人の記録」という本に書かれている。「犬の肉を競って食べた。海水で味付けをした」とある。現地で取材し、がくせんしました。

き、そこからバスに乗った」と言う。明治時代の話でなく、私が取材に行った時の話ですよ。下北に移住した会津の人たちの悲惨さを生の声で聞いて、ショックでした。今でも忘れません。会津藩士の下北移封は、太平洋戦争後の日本兵のシベリア送りと同じ。「死んでください」と言っているようなものだ。会津藩は京都で長州藩と戦った(禁門の変)。そして舞台は奥羽

同じことをしてしまっただ。△会津藩士の末裔、むつ市長の菊池渙治さんや青森県知事の北村正哉さんにも会った▽

和解の不可を実感

菊池さんは「斗南会津会」の代表で、地元で顕彰活動

青森県下北半島で、早乙女貢さん(左)と取材の打ち合わせをする星さん

